

携帯電話はどこまで使えるか

OWCC 中川和道 20221215

「山の教室」で「遭難事例研究」という科目を毎年 4 つ担当している。大阪府連の仲間の事故や羽根田治氏の著書から事故事例をとりあげて、教訓と克服策を学びあう。その討論でほぼ毎回、携帯電話の有効性はいかに？という議論が出る。そこで、今回は、これを掘り下げる。

「東京アルコウ会」の事故[1]の記事の、携帯電話にスポットをあててみよう。2006 年 3 月 19 日、猛吹雪の阿弥陀岳山頂から一般登山道を下って中岳沢のコル向かう 3 人パーティーの 1 人が下りの中間点付近で(滑落)凍傷にやられて動けなくなり不安定な斜面でテントをかぶる。行者小屋から阿弥陀岳を目指していた同会の別パーティー 2 名は携帯電話で交信。警察への救助要請を依頼された。ところが、なぜか、2 人パーティーが茅野警察署に救助要請をしたのは、美濃戸口の八ヶ岳山荘から 18 時 50 分であった。もう真っ暗になり猛吹雪が吹き荒れ、救助隊のその日の出勤は不可能であった。翌日 3/20 は強風だが快晴。ヘリは 3 名のご遺体を搬出した。この事故をわが事として分析討論するたびにみんなの疑問となったのは、美濃戸口まで降りる前に「なぜ行者小屋あたりで電話しなかったのか？」という点である。2 時間は節約できたはずだ。「山の教室」の参加者の誰もがそう思った。だが、それには、やむを得ない理由があったはずなのだ。

(1)行者小屋は閉鎖され電話を借りることができなかったのではないか。

(2)携帯電波が繋がらなかったかも。つながる場所を探しつつ下り、ついに美濃戸口まで下らねばならなかったのではないかと。 などなど。

実は、大阪府連の仲間たちは、冬の行者小屋や赤岳鉱泉小屋の近辺で、携帯が繋がる場所を探し回ってきた。赤岳鉱泉ではトイレの建物の 20m 上部で不安定ながらネットが繋がって高層天気図がとれたが毎年 OK ではなかった。行者小屋は探しても探しても中川には見つからなかった。

ブレイクスルーは、統合初級アルパインリーダー学校だった。Teruru の T 田さんが見つけた。行者小屋入口の外階段を登った屋外 2 階の高さに通信可能場所があったのだ。何年も試して、ずっと OK だった。さらにもうひとつ、見つけた。中山展望台が 2 つめの通信可能場所であった。

OWAF の仲間につよく伝えたい。「この 2 つを有効活用することは事故対策に有用です」と。

ところで、電話会社は、どう対応しているのだろう。ドコモは「携帯電話をご利用になれる登山道」[2]を公表している。その「八ヶ岳(阿弥陀岳周辺)」によれば、やまのこ村、美濃戸山荘付近から柳川北沢ぞいには一部途切れるものの赤岳高鉱泉小屋の手前まで、柳川南沢ぞいには行者小屋までほぼ「利用可能」だが「季節によって大幅に変動します」とのおことわりがなされている。そのとおり、実際にはほぼダメだった。「東京アルコウ会」の方々も電波不通にやられた可能性がある。この場所の携帯は事故の時に信用するには確実性が低い。ドコモ情報に頼りすぎはいけない。

大阪府連の仲間たちで、情報交換しませんか？再現性は期待できなくても、役に立つ情報だし、中川情報だけが正しい訳でもなさそうなのですから。

次は、穂高涸沢の夏の経験をお知らせしましょう。これもドコモ公開情報とは違いましたので。

[1]羽根田治『山岳遭難の教訓』、ヤマケイ新書、2015 年から p.23-50「春の爆弾低気圧」。

[2]検索は 携帯電話をご利用になれる登山道